

平成三十年度 福祉作文コンクール

最優秀賞 「釜石と福祉」

岩手県立釜石高等学校

二年 高木 悠（たかぎ ゆう）

私はこの作文を書くにあたり、初めて「福祉」とは何だろうと考えた。これまで福祉とは、介護や看護というだけの意味であると考えていた。しかし、国語の授業で福祉には人と人とのつながりや、思いやりという意味があるということを知り、実は私の身近にも「福祉」というつながりがあったのだと感じた。

私は釜石はとても「福祉」というつながりが強い地域であると感じている。一つ目の理由は、釜石の人は挨拶をすると、必ず挨拶を返してくれるということだ。普通の事と思うかもしれないが、他の地域に目を向けると意外とそうではない。私は小学二年生まで東京に住んでいたが、街ですれ違ったときに挨拶をした事やされた事が無かった。それが普通だと思っていたからだ。しかし、釜石に来て挨拶をする事が普通だということを知って驚いた。釜石の地域の人同士のつながりは、伝統的でとても大切なことだと思つた。二つ目の理由は、ボランティア活動がとても活発であることだ。大人のみならず、高校生の私たちもたくさんボランティアに参加してきた。そのボランティアに対する意識の高さが、釜石の「福祉」のつながりを強めているのだと思う。

印象に残っている私のボランティア活動を紹介しよう。今までに私は、地域の清掃活動や挨拶運動など、様々なボランティア活動を行ってきた。その中でも釜石の仙人峠マラソンのボランティアをしたことが特に印象に残っている。私の仕事は、ゴールテープを持つ事とランナーの写真を撮ることだ。どちらも大役であった。それは、私が初めて釜石のためにしたボランティア活動であった。それまで私は、仙人峠マラソンにこんなにくさんの人がボランティアで参加していることを知らず、とても驚き、同時にとても感激した。たくさんの人とボランティアスタッフの力で、一つのものを作りあげることが出来たことがとても嬉しかった。また、走り切つて達成感に満ち溢れている人を間近に見たり、撮影している私に気づいてポーズをしてくれる人がいたり、今までに無かつた刺激を受ける事ができ、仙人峠マラソンでのボランティアは、私にとって今でも忘れることのない経験となった。

しかし、私はボランティアをすることだけでなく、されたこともある。東日本大震災の時、私は直接の被害にはあつていないが、学校が避難所になった事で通うことが出来なくなり、電気やガスが止まったことで普通の生活が出来なくなった。私が受けたボランティアで一番心に残っていることは、近所の寮の人たちがしてくれたことだ。私の家は三階で、揺れがひどかつたため、寮の一階を貸し出してもらつた。また、食料もあまり無かつたため、寮の方が炊き出しをしてくれた。炊き出しは特別おいしいという物ではなかつたけれど、寮の方の優しさや思いやりが感じられて、今でも記憶に残る忘れられない出来事であった。私のために何かをしてくれたことよりも、その何かを私のためにしてくれた気持ちが嬉しかったのだ。

このように釜石の人たちは地域のつながりを大切にし、「福祉」の輪を広げ、強めていることが分かる。

しかし、私は、介護や看護の意味での「福祉」は、釜石ではあまり発達していないように思える。今日、日本では少子高齢化が進んでいて、釜石は特に割合が高いそうだ。人口減少も進んでいる釜石では、若い働き手が市外や県外へ行つてしまう問題も近年深刻化しているそうだ。

私は中学生の時に老人ホーム体験で、釜石にある老人ホームを授業で訪れたことがある。そこでは、ヘルパーさんの人数が少なく、一人のヘルパーさんが何人もの高齢者の方を介護していた。私はその光景がとても大変そうであつた事を覚えている。私は現在進路を考える時期である。これまでの経験を踏まえて、何か釜石のために役に立つ仕事をしたいという思いも大きくなつてきた。私の祖母は六十歳であるけれど、ヘルパーとして毎日老人ホームで働いている。私は地域に貢献する祖母の姿を見て、祖母を尊敬し、私も将来祖母のようになりたいと意識するようになった。

私はこの作文を通して、今までの釜石の「福祉」やこれからの「福祉」のありかたを深く考えることが出来た。これからも私は、積極的にボランティア活動をすることだ。釜石の伝統的な「福祉」の輪を広げ、大切にしていきたい。また、将来釜石のために出来ることを考えながら、今、釜石のために出来ることも考えていかなければいけないと、強く意識させられた。

平成三十年度 福祉作文コンクール

優秀賞 「わたしもがんばるよ」

釜石市立甲子小学校

二年 林 里緒菜（はやし りおな）

わたしには、五月に生まれたばかりの妹がいます。いまは、くびもすわって、だっこするのも楽になりました。ときどきひっかかれるけど、とてもかわいいです。

わたしが一年生のあきにお母さんから、

「こんど赤ちゃんがうまれるよ。」

と教えてもらいました。きょうだいができると聞いて「わたしもおねえちゃんになるんだ。赤ちゃんがうまれたら、何をしてあげようかな。」と、とてもワクワクしました。お母さんのおなかをさわって、大きくなるようにおねがいました。

お母さんのおなかは、すこしずつ大きくなってきました。わたしは、「大へんじやないのかな。くるしくないのかな。」と心ばいになりました。わたしは、おなかが大きいお母さんと、しゃがんでおふろの中をスポンジであらうのは大へんだと思って、わたしはまい日おふろそうじをすることにしました。せんざいがかおについたり、ずつとしゃがんでこすったりしていると、足がいたくなりました。でも、ピカピカになると、お母さんはここにこして

「ありがとう。とてもうれしいよ。」

と言ってくれます。

一年生のふゆ休みにお母さんがきゆうにおなかがいたくなつて、入いんしました。とてもさびしくて、なきそうになりました。お父さんといっしょにお見まいに行くと、かんごさんが点てきをかえたり、けつあつをはかったり、

「だいじょうぶですか。ちようしはどうですか。」

とお母さんと赤ちゃんに声をかけてくれました。わたしにも、

「赤ちゃん、元気にうごいているよ。」

と教えてくれて、はげましてくれました。お母さんと赤ちゃんのためにかんごさんは、一日に何回もお母さんのびよう室に来てくれていたそうです。とてもあん心したし、心づよかったと、お母さんから聞きました。お母さんは、ぶじに赤ちゃんがうまれるか、ふあんになったときも、かんごしさんがびよう室に来てくれるだけで、どんなおくすりよりも元気をもらったと思います。

二年生になったころ、お母さんはたいいんしました。スーパーに買い物ものに行ったとき、かいけいがおわるとおみせの人がおもいかごをはこんでくれました。

「足元、気をつけて下さいね。」

とやさしく声をかけてくれました。家につくと、わたしも買い物ものぶくろを一つもってみました。とてもおもくて、手もいたくて、とちゆうで立ちどまって、休みながら家まではこびました。おもくてもがんばってはこびました。

わたしは、いまもお母さんと妹とよくさんぽに出かけます。すると、

「かわいい赤ちゃんですね。」

と知らない人も声をかけてくれるので、うれしいです。

ニュースで赤ちゃんのおせわをしなくて、赤ちゃんがしんでしまったニュースを見ました。家ぞくがきよう力したり、まわりの人が声をかけてあげていれば、その赤ちゃんも元気に大きくなることができましたと思います。わたしも妹がおすわりやハイハイ、あるくようになって、はやくいっしょにあそびたいです。いま、お母さんは妹のおせわと家のおしごとをしています。じぶんでできることは、じぶんでやって、お手つだいもして、お母さんをたすけたいです。そして、お母さんが、かんごしさんにたすけてもらったように、わたしもだれかのやくに立つしごとを大きくなったらしたいです。そのために、べんきようやうんどう、いまできることを一生けんめいがんばります。

平成三十年度 福祉作文コンクール

優秀賞 「信じて前へ」

釜石市立唐丹中学校

一年 中居林 優心（なかいばやし こころ）

「きつと良くなるから一緒に頑張ろう。」

私には、くも膜下出血で闘病中の祖母がいる。祖母は六年前、作業中の船の上で倒れた。私はその時、小学校入学前だった。祖母のことが大好きな私。「いなくなっちゃったらどうしよう。」足がガタガタ震え、私は嗚咽をもらして泣いていた。祖母は、救急車に乗って病院へ行った。そして、病院に着いてすぐ、手術が始まった。私は、泣きながら祖母の無事を祈った。手術は無事、成功した。

次の日、祖母のいる病室へ行った。祖母は寝ていたが、顔を見るだけで笑顔になれた。今までの不安が、全部消えた。その時は。

まだ小学生だった私は、くも膜下出血がどんな病気か知らなかった。数カ月たってもまだ家に帰ってこない。久しぶりに祖母の病院へ行った。祖母と目が合い、私は笑う。でも祖母は笑わない。「治療で疲れているのか。」「元気がないだけかな。」とたくさん考えた。

すると、父に呼ばれた。「ばあちゃんは、今は、しゃべれない。右の手と足も動かない。だから、病院でリハビリしてるんだ。でも、練習すれば、少しずつ良くなるから、皆で支えような。」と言われた。その時初めて祖母の病気は深刻だと分かった。この前消えたはずの不安が、また、襲いかかってきた。

私は、そのとき決めた。「おばあちゃんは必ず話せるようになる。歩けるようになる。だから、私も一緒に頑張ろう。」

祖母だけが苦しい思いをしているのはだめだ。祖母が頑張っているのだから、私も自分のやるべきことをしっかりやろう。祖母の気持ちによりそいながら、今、私に出来ることはそれしかないと思った。

祖母は病院で苦しいリハビリをたくさんした。祖母と会える日は少なくなってきたが、会えなくても、自分が今頑張らないといけないことは必ずやり通した。学校のそうじなどの身近なことから、児童会や学級の仕事。勉強ももちろん一生懸命頑張った。皆の役にたてる仕事や、自分の力になるものも、最後まで、責任をもってやり通した。いつかはこの思いが祖母に届くと思っていたから。

でも、そんなにうまくはいかない。祖母の後遺症は、どんどん悪化していった。大きな街の病院に転院し、休日には、家族で病院へ行った。でも、行くと祖母は私達のことを誰だか分からなくなってきた。リハビリをしても、麻痺している右の足と手は使えない。だから、苦しくてもつらくても、祖母は利き手ではない左手で物を取っている。祖母の苦しそうな顔を見るのはつらい。祖母には、笑顔でいてほしい。会うたび心が苦しくなっていた。でも、私の気持ちは変わらなかった。「おばあちゃんと一緒に頑張るんだ。」

あれから、六年。私は中学生になった。祖母は現在、病院を無事退院し、家に戻ってきている。苦しいリハビリをへて、祖母は一人でも歩けるようになった。そして、六年前は一言も話すことが出来なかったが、今では、「おはよう。」「こんにちわ。」「どうも。」など、短い会話が出来るようになった。

話すだけでなく、「いす」「つくえ」などの文字も書けるようになった。笑顔をたくさん見せてくれるようになり、本当に嬉しかった。今では祖母が私達のことを誰だか分かっていると思う。祖母の目からそう感じる。

私はこの経験から、病気と日々闘っている人達の力強さと、信じてあげる大切さ、そばで支えてあげる大切さを、長い時間をかけて学ぶことが出来た。これからも、祖母から学ぶことがたくさんあると思う。そして、私は祖母を笑顔にする。これが、私が今できる恩返し。いつかはまた、祖母とたくさんおしゃべりして、一緒に笑い合いたい。大好きな祖母の笑顔をたくさん見たい。きつと、これからも苦しいリハビリは続く。けれど、おばあちゃん、一緒に頑張ろうね。

平成三十年度 福祉作文コンクール

佳作 「さわこ訪問・人にやさしく、笑顔の輪」

釜石市立栗林小学校

四年 川崎 夏織（かわさき かおり）

九月になると、私は、わくわくすることがあります。それは、昨年も訪問した「グループホーム さわこ」で、おじいさんやおばあさんに出会って、笑顔になって、心がなごやかになる体験をすることが出来るからです。

今年も、九月十四日にさわこ訪問をしてきました。

はじめに、私たちからの歌のプレゼントです。歌は、「ポイシイズ」と「もしも宝物を一つ」を歌いました。歌いながら、気がついたことは、泣いているおばあさんや体をゆらして、手びょうしをしながら、一緒に歌っているようなおばあさんもいて、何だかとてもうれしくなりました。

次に、私たちからの自己紹介を進めました。はやく仲よくなりたい思いで、目の前にいるおじいさん、おばあさん方に名前、学年の他、得意なことや苦手なことを大きな声でゆつくりと伝えました。その後、おじいさんやおばあさんからも名前と年れいを教えてもらいました。

そのとき、心に残ったことは、メガネをかけた九十三才のおじいさんです。受け答えがはきはきしていて、元気でおもしろい人だなと思いました。そして、自己紹介のきんちょうもいつの間になくなり、おじいさん、おばあさんとのきよりが、ちぢまったような感じがしました。

それから、楽しみにしていた中身あてクイズでは、子どもも大人も大いにもり上がりました。四年生のリーダーが、箱の中をかくにんして、周りの人たちが、大きさや形、色などを質問すると、「それは、せん風機ですか。」

「氷まくらですか。」

「熱さまシートですか。」

と答える友達がいて、みんなを笑わせてくれました。それを耳にしたおじいさんやおばあさんもだんだん、中身あてクイズに参加するようになりました。おじいさん、おばあさんたちも答えが分かってくる小さな声で、

「うちわ。」

と言うようになりました。実は、その答えは、本当に「うちわ。」だったので、クイズが得意な直感力のあるおばあさんだなと感心しました。

中身あてクイズがおわると、おじいさん、おばあさんとさようならをする時間になりました。私は、もつともつと、ここにいたかったなという思いになりました。

最後に、手をふっておわかれをする前に、おじいさんとおばあさんからのプレゼントをいただきました。それは、チョコレートやあめ、ラムネなどが入ったフェルトのふくろです。一はり、一はり、糸でていねいにぬったものです。私は、そのふくろをたからものにしようと思います。おじいさんやおばあさんからのプレゼントは、まだ他にもありました。それは、おじいさんとおばあさんの笑顔です。

おじいさんとおばあさんが、

「また来てね。」

と言って、笑顔で私たちを見送ってくれました。私は、

「はい。また来ます。」

と言って、大きく手をふりました。

さわこ訪問では、たくさんの笑顔に出会いました。人の心をなごませ、みんなを笑顔にしてくれる力があるおじいさん、おばあさん。そのおじいさんとおばあさんが、これからも元気で楽しくくらししてほしいなと思いました。私は、人にやさしく、笑顔の輪を広げていきたいです。

平成三十年度 福祉作文コンクール

佳作 「みんなが安心して暮らせる社会へ」

釜石市立唐丹中学校

二年 川原 凜乃（かわはら りの）

皆さんは最近、高齢者の運転による事故を耳にしたことはありませんか。私はよくニュースで耳にします。ブレーキとアクセルを踏み間違っ、店舗に突っ込んでしまったり、高速道路を逆走したりするなどの事故が多く報告されています。年を取るにつれて判断力が低下したり、認知症によって自覚がないまま運転したりすることが原因と考えられます。そのため、高齢者の免許返納の問題も時々耳にするようになりました。

私は、免許返納には賛成ですが、それによって困る人達もいます。都市部の人には近く便利な交通手段がたくさんあります。電車やバスなどがあって、徒歩や車でなくても手軽に移動できます。でも、近くにお店がなかったり、交通手段があまりなかったりする地域もあるのです。

私の住んでいる唐丹町でも、スーパーや病院は、とても歩いては行けません。私の家から一番近いスーパーまでは、約八キロメートルもあります。電車で行っても駅から遠くて、歩くのが大変な場合があります。病気だったり、大きな買い物袋を抱えていたりすると、本当に不便です。電車やバスの本数も少なく、二時間も待たなくてはいけない場合もあります。高齢者が免許を返納したら、とても不便になってしまいます。

しかし、最近私は移動販売車を見かけるようになりました。車に食品や日用品を積み、駅から遠い場所までやってきて販売しています。遠くに出て行けない人にはとても便利です。こういうものがもつとあったらいいと思います。他に、家で注文書に書き込んで渡すと、荷物を届けてくれる仕組みもあります。このように、多い高齢者の立場を考えた方法をもつと考えていく必要があると思います。

また、近所の人助け合う活動も広まっていけばいいと思います。そうしたら、一人でいることもなくなり、地域の輪が大きくなっていくと思います。

例えば、地域の人達で声をかけ合って、仲良くできるようなワークショップを開催するという活動が考えられます。地域のみんなが地域の一人一人を分かっているならば、一人暮らしの人に何かあったとき、すぐに駆けつけることができます。車を持っている人が、出かけるついでに声をかけて、乗せてあげることもできると思うのです。

日本は今、少子高齢化で高齢者の割合が増えています。だから今、私達がこのような仕組みを作っていけば、未来が変わります。車がなくても安心して暮らせる社会になれば、高齢の運転者による事故も減らせるようになると思います。このように、みんなが安心して暮らせる社会にしていくな必要があります。

とらえ方は人それぞれだと思いますが、私はみんなが安心して暮らせる社会とはこうだと考えます。みんなが安心して暮らせる社会を創るためには、みんなが一步を踏み出す勇気と思いやりが必要ですよ。

高齢者のことを考えた生活は、今まで以上に私達の助けが必要です。それを、「大変だ。」「めんどろだ。」と考えてしまっってはいけないと思います。誰しもいずれば年を取ります。それは避けられませんが、そのとき、助けになる人がいなかったらどうでしょう。

表面だけの思いやりや優しさでは、未来は変えられません。だから、自分から助けたり声をかけたりする勇気が大切です。中学生の私でもできることは、積極的に地域の活動に参加することです。そうすることで、地域の絆が深まり、助け合うことが自然な形でできていくと思います。

これから私は、自分から地域の人達を助けられる大人に成長していきたいと思っています。

平成三十年度 福祉作文コンクール

佳作 「釜石に恩返し」

岩手県立釜石高等学校

二年 洞口 留伊（ほらぐち るい）

私の夢は、二〇一九年ラグビーワールドカップを成功させることです。そのために、今私に出来ることは、自分の思いを発信することだと思います。

七年前の三月十一日。鵜住居小学校に通っていた私は、三年生でした。算数の授業を受けている時に地震が来ました。老人ホームに避難しましたが、土砂崩れが起きて、もっと高い所に逃げました。そして、たまたま通りがかったトラックに乗って、まちの体育館に避難しました。そこでは、生徒が一列に並んで、二人で一つのおせんべいを分けて、コップ一杯の水をみんなで回し飲みしました。寝る時も、ダンボールと新聞紙だけだったので、十分な睡眠が出来ませんでした。その後、甲子小学校の体育館に移動しました。そこで久しぶりの食事と睡眠を取り、生きていくことの喜びを感じる事ができました。また、たくさんの方々からの支援のおかげで、生活に必要なものが普及されていきました。小学校は双葉小学校に間借りをさせてもらいました。私たちが自分の小学校に通うことができるようになったのは、小学校五年生のときです。仮設の小中学校が完成し、そこで学校生活を送りました。

数年後、中学校二年生になった私に「釜石にラグビーワールドカップが来る」という知らせが届きました。そして、ラグビーワールドカップの親善大使が集められることになりました。私は、釜石でのラグビーワールドカップ成功のために役立ちたいと思い、立候補しました。そして、ラグビーワールドカップ二〇一五イングランド大会へ派遣されました。現地に着くと、日本語で話しかけてくれたり、日本の国歌を歌ってくれたり、とても温かく迎えられる嬉しかったです。私は、ラグビーの試合観戦は、この試合が初めてでした。初めは、スタジアムの雰囲気圧倒され、固まってしまうましたが、試合が進むにつれ一つ一つのプレーに一喜一憂するようになり、とても楽しくなりました。しかし、私が一番感動したことは、試合後、ファン同士が敵味方関係なく握手をし合い、一緒にゴミ拾いを始めたことです。私は、ラグビーは選手だけでなく、ファンも含めてフェアプレー精神だと思いました。帰国後、私はイングランドに派遣される前よりも、より一層ラグビーワールドカップの釜石開催を成功させたいと強く思うようになりました。そして、私にできることを考えているうちに、私がしなければならぬことは、震災から七年の間、たくさんの方々の支援をしてくれた世界中のみなさんに「感謝」の想いを伝えることだと強く思うようになりました。

私がこの七年五月ずっと伝えたかった「感謝」を伝えることが出来たのは、二〇一八年八月十九日です。この日は、鵜住居復興スタジアムが完成し、記念イベントが行われた日でした。私は、キックオフ宣言を行いました。そこで、世界中のみなさんに感謝を伝えることができました。

「世界中のみなさんの支援のおかげで私たちは震災から立ち上がる事が出来ました。たくさんの方々の支援ありがとうございます。」

このような文で、世界中のみなさんに「感謝」を伝えました。私の一つの夢が叶い、とても嬉しかったです。

八月十九日のイベントも含め、私が思っていることは、「生きる」ということは「助け合い」をすることです。震災の時、たくさんの方に助けられ、不自由のない生活ができるようになりました。イングランドに行った時、現地の方が道を教えてくれたりして助けてくれたので、無事に日本に帰ってくる事ができました。八月十九日に発表したキックオフ宣言の文章を考えると、ラグビーワールドカップ組織委員会の方々を始めとするたくさんの方々のおかげで、当日のキックオフ宣言を発表できました。このように、私たちは生きていくためにたくさん助けられています。今度は私がたくさんの方々の助けたいです。そのために、ラグビーワールドカップを必ず成功させたいです。釜石市でのラグビーワールドカップ開催を通して、釜石市が盛り上がっていくことが釜石への恩返しだと思います。

平成三十年 度 福祉 作文コンクール

佳作 「私たちと福祉」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 今出 愛花（いまで あいか）

「福祉」と聞くと、つい介護などと大きく考え過ぎてしまっていますが、ごみ拾いや地域行事に参加することも「思いやりの心」や「助け合いの心」に当てはまります。小さなことでも福祉につながるということを経験しました。それは、小学生の頃でした。

私が小学校五年生の夏休みの時に何か自分達で計画してボランティア活動を行うという取り組みをしました。この取り組みは地域別で行います。私の住んでいた地域では、私を含め、約十名ほどいました。当時は小学五年生でしたが、上の学年がいなかったので、もう一人の同級生の子とリーダーとなって計画しました。まず何をしようかと皆で考えた時に、

「ごみ拾い。」

という声が聞こえてきました。

私たちの地域には公園が一つありました。その公園では、高齢の方々がベンチに座っていたり、小さな子供たちが遊具で遊んでいたりと、にぎやかな憩いの場です。そこで、普段お世話になっているその公園で、ごみ拾いの活動をしようということになりました。それから、自分たちで日時や持参するものなどを決め、実行しました。

いよいよ夏休み中の皆で計画した日になりました。全員で決めた時間に集合し、ごみ拾いを始めました。暑い中、私はベンチがある自動販売機付近のごみ拾いを中心にしていました。そこで活動していると、日陰で涼みながらベンチに座っている高齢の女性から

「おつかれ様。ありがとね。」

と言われました。この時の感情は忘れません。高齢の女性から言われた直後、思わず顔がほころんでしまいました。

「いえいえ。こちらこそ。」

と言うと、にっこり微笑んでくださいました。小学校では、地域のボランティア活動を通して良い体験ができました。中学校でも、授業の一環として、生徒だけで校外でボランティア活動をしました。六つぐらいのグループに分かれ、根浜海岸や道路沿いのごみ拾い、介護施設の訪問などでした。小・中学校でボランティア活動をしてきて感じたことがあります。

一つ目は、誰でも小さなことから取り組めるということです。小学生の頃の私たちのように、小さな子から取り組もうと思えば近所のごみ拾いなどできます。現在、高校生の私たちなら、行動範囲が広くできることも多くなります。ボランティアは誰でもできるのだと思いました。

二つ目は、ほんの少しの気持ちが大きなものへと繋がるということです。目の前にごみが落ちていた場合、そのごみを拾うただそれだけですが、その場所が綺麗になるのです。例えば、これをたたくさんの人が行くと、どんどん綺麗になっていきます。

誰でもでき、小さなことから取り組むという気持ちが大切だなと思いました。これは、福祉の心に共通すると思います。これからもこの思いを忘れずに生活していきたいと思いました。

平成三十年度 福祉作文コンクール

佳作 「曾祖母との思い出」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 八幡 瑞姫（やはた みずき）

もうすぐ、とある施設の夏祭りが開催される。小学生の頃から毎年のように行っていたのに、今年からはもう行くことはない。今年も行きたかった。

私が産声をあげた時には、もう曾祖母は認知症だった。私のことを曾孫だと理解していたかどうかは分からないが、私は曾祖母が大好きだった。

そんな曾祖母は、私が小学生の頃に大腿骨を骨折して入院した。認知症の為に一人で上手に食事が出来なかったので、私は、母と一緒に曾祖母の入院する病院へ通った。その頃の曾祖母は、機嫌が悪い日が多かった。足の痛みだけではなく、知らない場所、知らない人の中での不安もあったのかも知れない。そんな曾祖母の様子を見て、「あんなに優しくかったのに」と悲しくなった。そんな曾祖母の為に、幼かった私に出来たことと言えば、いっぱい話し掛けたり、手をさすってあげることだけだった。こんなことしか出来なくても、やっぱり曾祖母の笑顔が見たくて、毎日自分なりに頑張った。

年齢的にも骨折部の手術は不可能で、曾祖母の寝たきりの生活が始まった。認知症の症状も進んでいた。退院と同時に施設への入所が決まった。遠く離れた場所だったので、入院していた頃のように毎日は会いに行けなくなったけれど、会いに行った時には、学校の話をしたり、食事のお世話も少しだけお手伝いしたりして、短い時間を楽しい時間にした。毎年施設で開催される夏祭りも、曾祖母はベッドの上からだったけれど、外に出してもらって、一緒にみんなが踊っている盆踊りや、様々な催し物も楽しく見た。私のことや母のことがちゃんと分からなくても、曾祖母の笑顔が見られればそれで幸せだった。

そんな曾祖母が体調を崩しやすくなったのは、私が中学生になってからだだった。「いつ逝ってもおかしくない。」何て言われることが何度もあって、その度に心配になった。最悪な状態なことも覚悟しながら施設へ駆け付けると、そこには落ち着いた状態の曾祖母の姿があり、どんなに安心したことだろう。

中学三年生になり、私も受験生になった。受験日に近づくにつれ、私は施設にいる曾祖母へ会いに行く日が減少していた。長らく会いに行けなかった分、卒業式後に卒業証書を持って会いに行く予定だった。それなのに、間に合わなかった。曾祖母は私の高校受験の翌日に永遠の眠りについたので。

実は曾祖母がなくなる四ヶ月前、曾祖父も永眠していた。末期がんだった。発見した時にはもう手術が出来ない状態だったけれど、無理せず静養していればすぐには逝かないはずだったのに、急変したのだ。救急車で病院へ運ばれてからも、家に帰りがた曾祖父。数日前に会った時には元気だったから、また家に帰れる日が来ると思っていた。それがまさかこのままお別れになるなんて思いもしなかった。

曾祖母の葬式の際に親戚の方々にごう言われた。

「曾孫の高校受験が終わるまで待つてくれたんだね。」

と。こればかりは分からないけれど、もしかしたら本当にそうなのかもしれない。高校受験が終わってから、曾祖父が曾祖母を迎えに来たのかもしれない。

曾祖母が施設に入ってから、ずっと離れ離れだった曾祖父と曾祖母。今頃は天国で仲良く暮らしているのかもしれない。身近な人の死は悲しいけれど、曾祖父と曾祖母がまた仲良く一緒にいることが出来ているとしたら、私は嬉しく思う。

もうすぐ、曾祖母がお世話になっていた施設の夏祭りが開催される。今年から私は行くことがなくなってしまうたけれど、もしかしたら、曾祖母は曾祖父と一緒に天国から見に来るかもしれない。あの頃は踊れなかった盆踊りを二人で一緒に手を取り合っで踊っているのかもしれない。目をつぶると元気だった頃の曾祖母の姿は私には分からないはずなのに、曾祖父と一緒に笑い合っで楽しそうにしている姿が描かれている。